

# 体育教師教育カリキュラムの検討

— 愛媛大学での模擬授業の実践を例にして —

日野 克博<sup>1)</sup>

**An examination of the curriculum for physical education teacher education**

Katsuhiro Hino<sup>1</sup>

**Key words : physical education teacher education, demonstration class, evaluation of class**

**(Bulletin of Department of Physical Education, Faculty of Education,  
Ehime University, 4, 49-57, March, 2003)**

キーワード：体育教師教育，模擬授業，授業評価

## I はじめに

現在，学校現場では，社会や学校を取り巻く大きな変化のなかで，「生きる力」の育成や「ゆとり」の中の特色ある教育の充実が求められている．一方，いじめ，不登校，学級崩壊への対応など様々な課題が山積されており，それらに対する教員の果たすべき役割は一層重要になってきている．

平成9年7月，教員職員養成審議会（1997）より「新しい時代に向けた教員養成の改善方策について」の答申が行われ，「実践的な能力をもった教員の養成」や「具体的な授業場面に即した指導経験を充実させるカリキュラムの充実」が提言された．また，高橋ら（2001）による教員養成系大学・学部のカリキュラム改革に関する調査では，教員養成系大学・学部において「授業の指導能力を向上させる科目の充実」や「教育実習とそれに関連する指導の充実」の必要性が示唆された．

こうした状況において，よりよい体育教師を養成していくための今日的な課題の一つとして，大学での授業をよりよく改善していくことが指摘されている（国立の教員養成系大学学部の在り方に関する懇談会，2001）．そのことを受け，各大学では教師養成に関わった様々な授業が実施されるようになり，とくに実

践的指導力の育成を意図した模擬授業やマイクロティーチング等の取り組みが報告されるようになってきた（向山ら 2001，2002；長谷川，2001；岡出ら，2001a，2001b）．

しかし，こうした取り組みについての研究報告や実践事例はまだ数が少なく，具体的な内容や成果についても十分検討されていない．体育教師教育カリキュラムのあり方が問われているなか，具体的な実践や成果に基づいて体育教師養成カリキュラムを検討していく必要がある．

そこで，本研究では愛媛大学での模擬授業を核とした授業実践を1つの事例として報告し，その成果と課題について考察を加え，今後の体育教師教育カリキュラムの改善を図る基礎資料を提供することにしたい．

## II 授業の概要

### 1. 対象授業

表1は，愛媛大学教育学部で開講されている保健体育に関連する教職科目・実習を示したものである．本研究では，愛媛大学教育学部で開講された平成13年後期の「保健体育科教育法Ⅰ」と平成14年前期の「保健体育科教育法Ⅱ」の授業を対象にした．これらは，中学校及び高等学校教諭教員職員免許状（保健体育）を取得するための教職科目であり，教育実習に向けた事前指導としての役割も担っている．「保健体育科教育

1) 愛媛大学教育学部  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

1. Faculty of Education, Ehime University,  
Bunkyo-cho, 3, Matsuyama-shi, Ehime, 〒790-8577,  
Japan

法Ⅰ」では33名、「保健体育科教育法Ⅱ」では30名の学生が受講した。

表1. 体育に関する教職科目・実習

学年	学期	学校教育教員養成課程 保健体育専修	生活健康課程 健康スポーツコース
1年	前期	観察実習	
2年	前期	小学校体育科教育法 小学校教科・体育	
	後期	*保健体育科教育法Ⅰ	
3年	前期	*保健体育科教育法Ⅱ 保健体育科教育法Ⅲ	
	後期	教育実習	
4年	前期	(応用実習)	教育実習
	後期	保健体育科教育法Ⅳ 総合実習	

( ) は希望者が選択, \* は本研究の対象授業

## 2. 「保健体育科教育法Ⅰ」

「保健体育科教育法Ⅰ」では、模擬授業の経験を通して、よい体育授業を実現するための教材づくりや学習指導のあり方について学習することを目的とした。表2は、授業の展開(内容)を示したものである。1~4回目までは、模擬授業を実施するにあたっての基礎的知識や授業構想の視点について授業を行った。なお、3回目の授業では、教育実習を終えたばかりの3回生に、教育実習の体験談や教育実習を振り返った感想等を話してもらい、これから模擬授業を実施する2回生の動機づけを図った。そして、5回目の授業からは模擬授業を実施し、模擬授業の後には必ず反省・検討会のための授業を位置づけた。さらに、その後も模擬授業と反省・検討会を繰り返しながら授業を展開した。なお、受講生を6グループに分け、担当グループが学習指導案を作成し、他の学生が生徒役となって模擬授業を行った。15回目の授業(模擬授業⑦)では、筆者自身が模擬授業を実施した。

次に、表3は1時間の授業の進め方を示したものである。模擬授業を実施する時は、①模擬授業の説明、②模擬授業、③模擬授業の反省の流れで展開した。模擬授業の説明では、各グループで作成した学習指導案に基づきながら、単元のねらい、本時の位置づけ、これまでの展開、授業の約束事などについて担当グループに説明させた。続いて、模擬授業を実施するが、その様子はVTRに収録するようにした。また、授業の反省では、授業終了後、直ちに授業評価を実施するとともに残りの時間で教師役、生徒役の学生から感想を述

表2 「保健体育科教育法Ⅰ」の展開

回	内 容	回	内 容
1	オリエンテーション	9	模擬授業③
2	体育では何ができるの -保健体育科の目標・内容	10	模擬授業④
3	教育実習はすごく大変 -実習生の生の声を聞く	11	体育の授業は準備が命 -学習資料、学習カード
4	体育の準備は結構大変 -授業計画の作成の仕方	12	模擬授業⑤
5	模擬授業①	13	模擬授業⑥
6	ほめることは簡単? -教師の関わり方	14	なぜ体育が嫌いになる? -できない子への指導
7	模擬授業②	15	模擬授業⑦
8	教師はよいマネージャー -授業のマネジメント	16	総括 -よい体育授業の条件

表3 1時間の授業の進め方

回	模 擬 授 業	反省・検討会
授業の流れ ↓	①授業の説明	①資料配付 ・レポートのまとめ
	②模擬授業 *VTRで収録	②模擬授業のVTR (批評、助言、解説) 授業評価 (授業分析の結果)
	③授業の反省 ・授業評価 ・感想	③本時のテーマ ・教師の関わり、授業の マネジメントなど ・教育実習生の実態 ・模擬授業との比較 ・VTRによる解説

べてもらった。

一方、反省・検討会の授業では、①資料配付、②模擬授業の反省(VTR)、③テーマに関連した指導と助言で展開した。なお、模擬授業の反省・検討会をより充実させるために次のような点に留意した。

- ・ 各自のレポート(良かった点、改善点)を、場面あるいは内容ごとに整理し、それを資料として配布して各自の反省点を共有化させ、次の模擬授業にかけるようにする。
- ・ 模擬授業を約15分に編集したVTRを作成し、具体的な授業場面に対応させて指導や助言を行う。
- ・ 授業評価や模擬授業の授業分析(マネジメント、相互作用)の結果を提示し、客観的なデータに基づきながら指導や助言を行う。
- ・ その時間のテーマに関連した模擬授業の分析結果、教育実習生、一般教師を対象にした先行研究、優れた授業実践のVTRなどを用いて指導や助言を行

う。

### 3. 「保健体育科教育法Ⅱ」

「保健体育科教育法Ⅱ」では、「保健体育科教育法Ⅰ」ならびに「教育実習」の課題や改善点を考慮して授業計画を作成した。前年の教育実習生の授業から、「教師の関わりが少ない」「授業時間をオーバーしてしまう」「単元としてのとらえ方ができない」「学習ノートや参考資料が活用できない」「明確な指示や号令がかけられない」といった課題が指摘された（日野，2002）。そこで、「保健体育科教育法Ⅱ」では、「保健体育科教育法Ⅰ」の経験を踏まえ、さらに教育実習との関連を図りながら、授業内容を設定した。表4は、授業の展開（内容）を示したものである。

「保健体育科教育法Ⅱ」の授業においても、中心的な内容は模擬授業である。ただし、表5に示すような条件を加えることにした。「保健体育科教育法Ⅰ」では、まず第一に経験することを重視して、教材、授業時間、対象、教師の人数などに条件を与えないで、担当グループが自由に決定できるようにし、学習指導案についてのみ模擬授業実施の2日前までに提出させ、チェックを受けることにしていた。「保健体育科教育法Ⅱ」では、教育実習との関連を図り、より学校現場に近い条件で実践することを意図して、次のような条件を設定した。

- 単元としてのとらえ方を意識させるために、6時間単元の授業を計画し、各グループがリレー方式で担当する。
- 単元教材は、技術的な指導や安全管理が求められる器械運動にする。
- 前年の教育実習において教室で授業をすることがあったことから、単元のなかの1時間は教室で授業をする。
- 時間は実際の学校現場と同様に準備や片づけも含めて50分で終える。
- 教師役は2人で、チーム・ティーチングで行う。
- 教育実習と同じ学習ノートと学習資料を活用する。

また、11回目、12回目の授業では、実際に教育実習で指導にあたる附属中学校の教諭に、模擬授業で十分に経験できなかったところや課題が残った点について指導や助言をお願いした。

表4 「保健体育科教育法Ⅱ」の授業内容

回	内 容	回	内 容
1	オリエンテーション	8	模擬授業④
2	優れた実践から学ぶ	9	模擬授業⑤
3	体育授業を構想する	10	模擬授業⑥
4	授業計画づくり (グループ活動)	11	現場の声を聞く① (実地指導講師の講演)
5	模擬授業①	12	現場の声を聞く① (実地指導講師の講演)
6	模擬授業②	13	教育実習にむけて何をすべきか
7	模擬授業③	14	総括

表5 模擬授業の条件

	保健体育科教育法Ⅰ	保健体育科教育法Ⅱ
教材	各グループ自由選択 • たわしホッケー • ソフトバレー • インディアカ • 体ほぐしの運動 • バasketボール • ドッジボール	器械運動 (各グループでリレー方式) (1回は教室の授業を含む)
時間	50分を目安	50分(準備、片づけを含む)
教師	特に条件なし	2人(T.T)
資料	特に条件なし	学習ノート、体育実技書を活用する(教育実習と同様)
計画	模擬授業実施2日前に指導計画案を提出	グループ間で課題の引継を行う

### 4. 模擬授業の授業改善の方法

#### 1) 授業改善のための調査(授業評価)

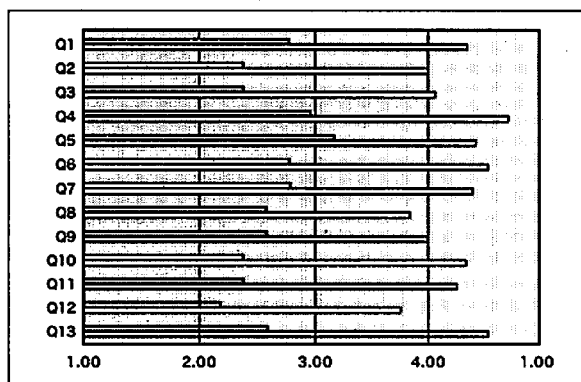
模擬授業の改善を図るために、模擬授業終了後に、授業改善のための調査(以下、授業評価)を実施した。なお、体育授業を実践するには多様な要因が考えられるが、これまでの高橋ら(2000)の研究を通じて子どもが評価する体育授業の基礎的条件として明らかにされてきた「授業の勢い」と「授業の肯定的雰囲気」に焦点をあて質問項目を作成した。

「授業の勢い」とは運動学習時間を十分確保し、スムーズに授業を展開させることであり、「授業の肯定的雰囲気」とは教師の賞賛や励ましによって温かい雰囲気を醸し出すことである。これらのことは、どの教材、どの学年、どの段階においても必要とされる条件であり、教育実習までにこれらを意識して実践できる力を身につけさせたいと考えた。また、その他にも、体育授業を実施する際に求められる学習指導のあり方、学習環境の整備、安全管理に関す

る項目も加えることにした。表6は、模擬授業の反省・検討会のときに提示した授業評価の一例である。模擬授業終了後、調査票を配布し、生徒役、教師役の学生にその授業を振り返って回答させる。回答は「たいへんあてはまる」を5点、「よくあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点として、5点満点で平均点を算出した。

表6 バスケットボール授業評価

		生徒役	教師役
		平均	平均
Q1	学習のねらいやめあてが明確だった	4.36	2.80
Q2	学習の進め方や学び方が明確だった	4.00	2.40
Q3	学習のまとめや評価が明確だった	4.09	2.40
Q4	先生は、生徒の学習活動や様子を積極的に観察・巡回していた	4.73	3.00
Q5	先生は、発問(問いかけ)や応答・受理を積極的に与えていた	4.45	3.20
Q6	先生は、賞賛(誉める)や励ましを積極的に与えていた	4.55	2.80
Q7	先生は、助言やアドバイスを積極的に与えていた	4.41	2.80
Q8	先生は、生徒一人ひとりに積極的に関わっていた	3.86	2.60
Q9	準備や移動、後片づけなどの場面や時間が少なかった	4.00	2.60
Q10	運動学習時間が十分確保されていた	4.36	2.40
Q11	学習資料(学習ノート、カード)が有効に活用されていた	4.27	2.40
Q12	安全面が十分配慮されていた	3.77	2.20
Q13	「よい授業」だった	4.55	2.60



## 2) 各模擬授業終了後のレポート

模擬授業を振り返って、具体的な感想や反省(良かった点、改善点等)を自由記述方式でレポートさせた。その結果は、表7のように、各授業場面あるいは内容ごとに良かった点と改善点に整理し、授業反省・検討会のときに資料として提示した。

表7 バスケットボールの感想・改善点(一例)

説明・練習	<ul style="list-style-type: none"> <li>○簡単にわかりやすく専門的な戦術(ハーフコートマンツーマン)を説明してくれた</li> <li>○一人一人がボールにさわる時間が十分に確保されたのでよかった</li> <li>●見せるだけの指導だったので、ゲームにあまり生かせなかった</li> <li>●Vカットの説明のとき先生の背中の方から観ていたので逆だと見やすかった</li> <li>●3角パスの目的を教える必要もあったと思う</li> </ul>
作戦会議	<ul style="list-style-type: none"> <li>○作戦会議が充実していた</li> <li>○ゲーム間に先生がチームを回ってアドバイスしてくれてよかった</li> <li>●目標を立てるとき具体的にどういふことをやっていいのかわ見当つかなかった</li> <li>●作戦を自分たちで考える力も身につけさせないといけなと思った</li> </ul>
ゲーム	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ボーナス得点の制度はおもしろかった(でも5人100点は高すぎるのでは)</li> <li>○ルールの工夫によって、グループの団結や運動量が増えてよかった</li> <li>○ルールが工夫されていて、本時の目標である「全員シュート」との兼ね合いも明確でよかった</li> <li>●新しい戦術を教えてくれたけど、試合ではあまり活用できなかった</li> <li>●全員シュートとVカットでフリーを作ることが強く結びついているとは言えない</li> </ul>
教師の言葉	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教師の対応が明るかったのでとてもよかった</li> <li>○今回の授業でもっとも目立ったのが先生の笑顔(スマイル)だった</li> <li>●シュートを入れるコツやパスの回し方とかもう一度確認する時間があってもよかった(技術の指導)</li> <li>●もっとこうしたらいいよとか、具体的なアドバイスもしてほしいかった</li> </ul>

## III 模擬授業の成果と課題についての考察

模擬授業を実施するねらいの1つは、各グループが作成した学習指導案に基づき実際に授業を行うことを通して授業を実践する能力を向上させることである。そして、もう1つのねらいは、実施した模擬授業を反省・検討することを通して体育授業を実践する際に生じる様々な問題点や課題を理解することである。

そこで、学生による授業評価並びにレポートの内容分析から、模擬授業の成果と課題について考察する。

### 1. 保健体育科教育法I

表8、図1～4は、「保健体育科教育法I」の模擬授業を受けた学生の授業評価をまとめたものである。これらのデータは、16回目の総括の授業のときに提示する資料でもある。

「保健体育科教育法I」では、各グループが自由に教材や授業時間、教師の人数等を決めて、学習指導案を作成して模擬授業を実践した。そのため、模擬授業

ごとに教師役が異なり、展開の仕方や学習形態に大きな違いがみられた。したがって、授業評価の結果をみると、授業ごとに評価のばらつきがみられる。しかし、図2の教師行動に関する項目に着目すると、模擬授業を重ねるごとに教師の巡視や相互作用に関する評価が概ね右上がり向上していることが確認できる。とくに、「Q7. 先生は、賞賛や励ましを積極的に与えていた」の項目の変容が大きくなっていた。これは、最初の模擬授業の反省・検討会で、「ほめる」ことに焦点をあて指導・助言したことや毎回のレポートの反省に教師の相互作用に関するコメントが数多く寄せられていたことが影響していたと思われる。すなわち、教師の巡視や相互作用に関する行動は、教材や学習形態に関係なく、それらを意識することで容易に実践することができるようになったと考えられる。教師の相互作用の重要性については、従来の授業研究においても一貫して報告されてきた(高橋, 2000)。相互作用を意識して実践することは、教育実習においても大切にされる必要があるといえる。なお、6回目の模擬授業では、相互作用の評価が大きく下がっていた。授業を観察した印象では、授業計画が不十分であったために授業のマネジメントに苦勞し、相互作用を意識する余裕がなく、相互作用の頻度も少なくなっていた。生徒役の学生もそのことを的確に捉えており、そのために授業評価も低くなっていたと推察できる。また、「Q8. 生徒一人ひとりに積極的に関わっていた」の項目についても、6模擬授業を通して低くなっていた。図4の各項目の6模擬授業の平均点をみても、この項目がもっとも評価を下げていたことがわかる。これまでの授業研究では、子どもの授業評価を高めるためには、個々人に対する相互作用を増やすことが指摘されている。教師役が複数いたにもかかわらず、どの授業においても評価を下げたということは、より一層このことを意識して取り組む必要があると言える。

一方、よい体育授業の基礎的条件として「授業の勢い」がある。これは、運動学習時間を十分確保し、スムーズに授業を展開することを意味している。このことに関連した項目は「Q10. 運動学習時間が十分確保されていた」であるが、表8、図3をみると概ね4.00以上で高く推移しており、図4の6模擬授業の平均をみても4.16と他の項目と比較して高い評価になっていた。「授業の勢い」に関する指導・助言は、2回目の模擬授業後の反省・検討会で行ったが、2回目以降の授業で評価が高くなっている傾向がみられた。このことから、運動学習時間を確保するための指導計画や教材、場の工夫がなされ、それらが実行されていたもの

と推察できる。

また、授業評価がプラスに改善されていった項目に「Q11. 学習資料(学習ノートなど)が有効に活用されていた」があった。実際に、授業のめあてや課題、チームの作戦などを記入する学習カードや授業の学び方やゲームの進め方、ルールなどを示した資料などが授業を重ねるごとに用意されるようになり、それにより評価が高くなったと考えられる。

一方、授業評価が低かった項目に「安全面が十分配慮されていた」がある。体育授業では活動が中心となるため怪我や事故が生じやすく細心の注意が求められる。したがって、この項目の得点が低かったことは、安全面への注意を一層意識させる必要があることを示唆している。

表8. 「保健体育科教育法Ⅰ」の授業評価

質問項目	模擬授業						平均	
	1	2	3	4	5	6		
Q1	学習のねらいやめあてが明確だった	3.41	4.41	4.29	3.96	4.36	3.50	3.99
Q2	学習の進め方や学び方が明確だった	4.09	4.24	3.79	4.00	4.00	3.50	3.94
Q3	学習のまとめや評価が明確だった	3.73	3.93	3.50	4.24	4.09	3.65	3.86
Q4	先生は、生徒の学習活動や様子を積極的に観察していた	4.18	4.17	4.61	4.32	4.73	3.96	4.33
Q5	先生は、発問や応答・受理を積極的に与えていた	3.68	3.66	4.14	3.84	4.45	3.54	3.89
Q6	先生は、賞賛や励ましを積極的に与えていた	2.91	3.72	4.14	4.20	4.55	3.62	3.86
Q7	先生は、助言やアドバイスを積極的に与えていた	3.27	3.79	4.36	4.08	4.41	3.46	3.90
Q8	先生は、生徒一人ひとりに積極的に関わっていた	3.05	3.28	3.75	3.72	3.86	3.15	3.47
Q9	準備や移動、後片づけなどの場面や時間が少なくできた	3.68	4.00	4.00	3.80	4.00	3.46	3.82
Q10	運動学習時間が十分確保されていた	4.05	3.97	4.07	4.32	4.36	4.19	4.16
Q11	学習資料(学習ノートなど)が有効に活用されていた	4.32	3.86	3.86	4.32	4.27	4.31	4.16
Q12	安全面が十分配慮されていた	3.68	3.72	3.50	3.96	3.77	3.69	3.72
Q13	「よい授業」だった	4.32	4.17	4.32	4.60	4.55	4.19	4.36

図1. 学習指導場面の教師の説明の明確さ

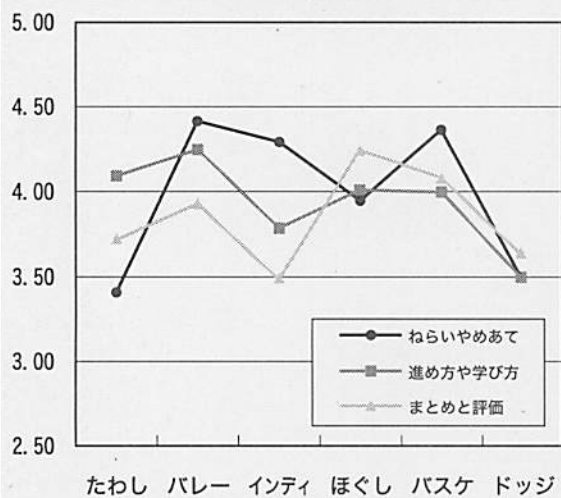


図2. 教師の巡視行動と相互作用行動

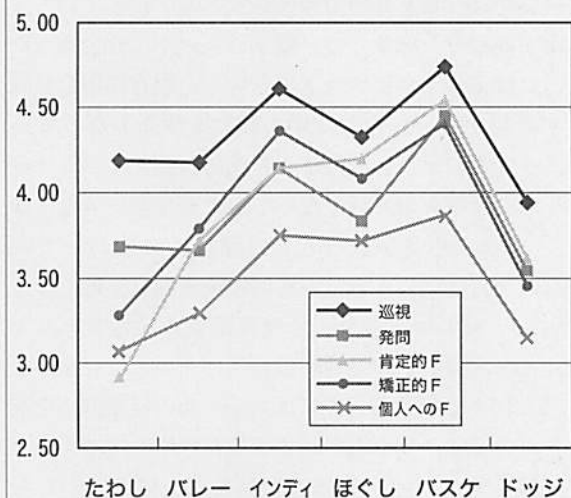


図3. 授業場面の確保と学習環境の整備

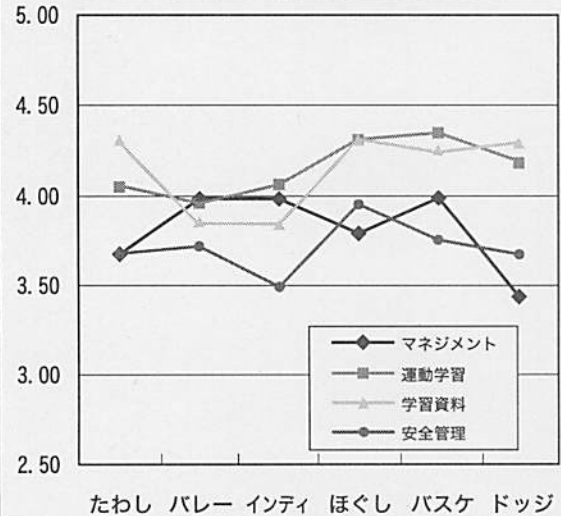
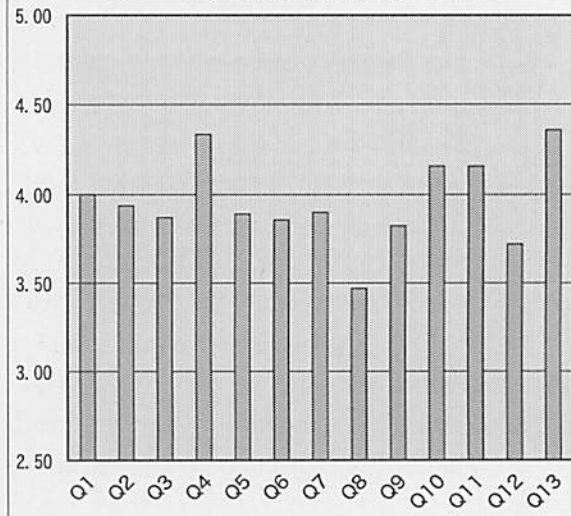


図4. 6模擬授業の各項目の平均点



2. 保健体育科教育法Ⅱ

表9、図5～8は、「保健体育科教育法Ⅱ」の模擬授業を受けた学生の授業評価をまとめたものである。

「保健体育科教育法Ⅱ」では、「保健体育科教育法Ⅰ」で模擬授業を経験したことから授業評価も向上することを予想していた。しかし、全体に「保健体育科教育法Ⅰ」よりも評価を下げ、各授業ごとにばらつきがみられた。これには次のような要因が考えられる。

まず1つには、6グループが1つの単元を展開するための共通理解や共通認識が十分に確認されていないことがあげられる。模擬授業実施前に、全体で授業計画案の構想を練ったが、単元の見通しや単元の学習過程が十分に検討されないまま模擬授業が始まった。そのため、各授業の位置づけやねらいが不明確なまま、授業ごとの課題の引き継ぎも十分行われなかった。次に2つ目として、教師役2人がチーム・ティーチングで授業をする条件が与えられていたが、それが上手く機能しなかったことがあげられる。2人がどのような役割でどのように関わればよいか、特に、T2(補助的な役割の教師)の関わり方がどのグループも消極的であり、その結果、「生徒一人ひとりに積極的に関わる」の項目は低い値のまま推移していた。そして、3つ目は、50分以内に授業を終えるという条件があげられる。用具の準備、後片づけ、準備運動、整理運動、学習ノートへの記入などに時間を費やし、主運動に関する時間が少なくなったり、時間に追われる授業も少なくなかった。

これらは「保健体育科教育法Ⅱ」で新しく模擬授業の条件として加えられたものであり、より実際の授業を想定したものであった。そのため、授業実施上の条件が難しくなり、「保健体育科教育法Ⅰ」と比べ授業評価も低くなったものと思われる。しかし、こうした諸問題を今後の課題として受けとめ、今回の経験が教育実習等で生かされることを期待したい。

なお、表10は、「保健体育科教育法Ⅰ」及び「保健体育科教育法Ⅱ」の総括として、よい体育授業を実現するための条件についてレポートさせたものを分析し、授業評価の項目に関連した内容の記述がみられた割合を示したものである。「保健体育科教育法Ⅰ」では、約9割の学生が教師の相互作用のことについて述べており、それ以外の項目も4割以上の人がこれらの項目に関連したことがよい体育授業を実現するために必要だと述べていた。一方、「保健体育科教育法Ⅱ」においても教師の相互作用と授業の勢いは約7割を越える学生がその重要性を意識しており、よい体育授業の基礎的条件である「授業の勢い」と「授業の肯定的雰囲気」についての認識を深めたものといえる。

表10. 総括レポートの内容分析

観点 ( )は授業評価の項目	保健体育科教育法Ⅰ 32人中(%)	保健体育科教育法Ⅱ 30人中(%)
直接的指導(1～3)	18(56.2)	12(46.2)
教師の相互作用(4～7)	29(90.6)	23(88.5)
授業の勢い(9～10)	14(43.7)	18(69.2)
学習環境(11)	14(43.8)	6(23.0)
安全管理(12)	16(50.0)	10(38.5)

Ⅳ 摘 要

本研究の目的は、体育教師教育カリキュラムの改善を図る1つの試みとして、愛媛大学での模擬授業の実践を通して、その成果と課題について検討することであった。そこで、平成13年後期の2回生対象の「保健体育科教育法Ⅰ」と平成14年前期の3回生対象の「保健体育科教育法Ⅱ」に模擬授業を取り入れ、実践と反省を繰り返しながら授業を展開した。

その結果、授業評価やレポートのデータを参考にしながら反省的に模擬授業を実践していくことで、授業を行う上での実践的な課題に気づくことができ、とくに、よい体育授業の基礎的条件である「授業の勢い」や「授業の肯定的雰囲気」についての認識を高めることができたと思われる。なお、模擬授業によって具体的にどのような指導力が身につく、実際にどのような効果があったかについては、教育実習等での実践を通して検証していく必要がある。

一方、授業評価を活用した模擬授業中心の授業に対する評価についても検討する必要がある。今回の模擬授業を行った学生の感想からは、「実際に経験してわかったことが多い」「次の時間にデータが整理されていてわかりやすかった」に類する意見が多くみられた。模擬授業だけでなく、反省・検討会において客観的、主観的なデータを参考にしながら授業改善を図ったことは、学生には新鮮かつ印象的な経験になったと思われる。ただし、今回の実践を通して次のような課題も確認できた。今後、これらの課題を参考にしながら、よりよい体育教師を養成するための授業改善が図られる必要があるといえる。

・時間的な制約もあり、全ての学生が教師役を経験することはできなかった。できるだけ多くの学生が実際に指導する場面を提供することは大切にされる必要がある。そのためには、教師役の人数、授業時間、学習集団、指導内容などを限定したり、調整することで対応することもできる。今後、こういった



表9. 「保健体育科教育法Ⅱ」の授業評価

質問項目	模擬授業						平均
	1	2	3	4	5	6	
Q1 学習のねらいやめあてが明確だった	4.04	3.82	4.59	4.23	3.92	4.60	4.20
Q2 学習の進め方や学び方が明確だった	4.28	3.45	4.18	3.88	3.85	4.44	4.01
Q3 学習のまとめや評価が明確だった	3.36	3.41	4.14	3.65	4.15	4.64	3.89
Q4 先生は、生徒の学習活動や様子を積極的に観察していた	4.36	3.68	4.00	4.35	4.50	3.80	4.12
Q5 先生は、発問や応答・受理を積極的に与えていた	4.16	3.41	3.73	4.23	3.81	3.56	3.82
Q6 先生は、賞賛や励ましを積極的に与えていた	3.16	3.55	3.41	3.46	4.15	4.40	3.69
Q7 先生は、助言やアドバイスを積極的に与えていた	3.56	3.64	3.91	4.08	4.00	3.80	3.83
Q8 先生は、生徒一人ひとりに積極的に関わっていた	3.40	3.41	3.41	3.38	3.54	3.44	3.43
Q9 準備や移動、後片づけなどの場面や時間が少なくできた	3.52	3.27	3.41	3.77	3.73	3.52	3.54
Q10 運動学習時間が十分確保されていた	3.04	3.45	4.18	3.35	3.73	4.20	3.66
Q11 学習資料(学習ノートなど)が有効に活用されていた	4.08	3.18	3.77	4.31	2.81	3.48	3.61
Q12 安全面が十分配慮されていた	4.20	3.59	3.73	3.50	3.42	3.46	3.65
Q13 「よい授業」だった	4.20	3.86	4.18	3.96	4.12	4.72	4.17

図5. 学習指導場面の教師の説明の明確さ

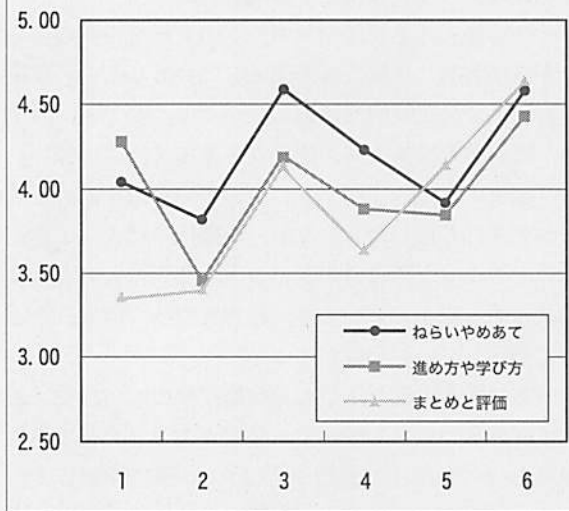


図6. 教師の巡視行動と相互作用行動

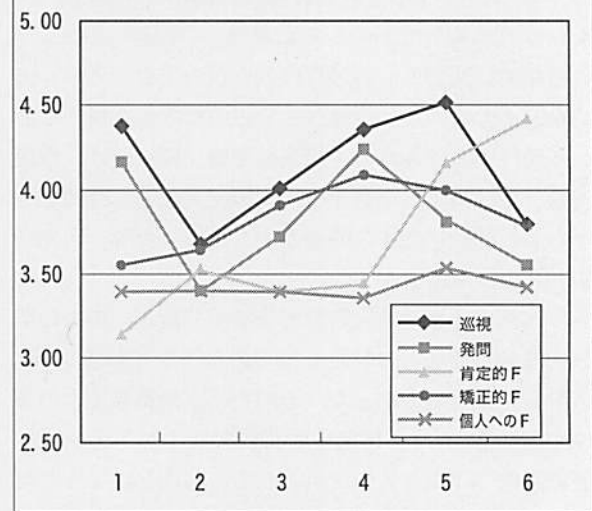


図7. 授業場面の確保と学習環境の整備

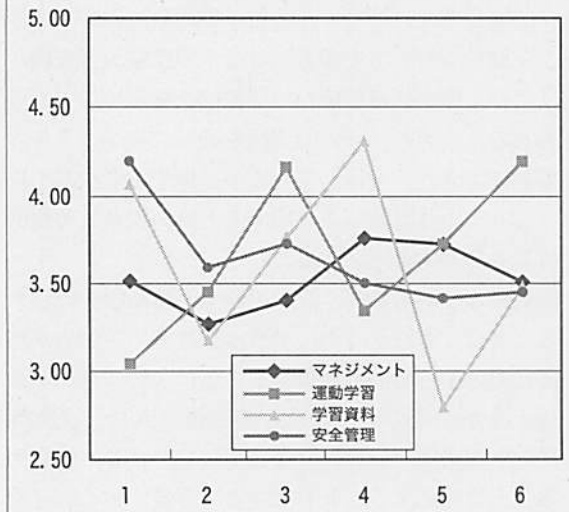
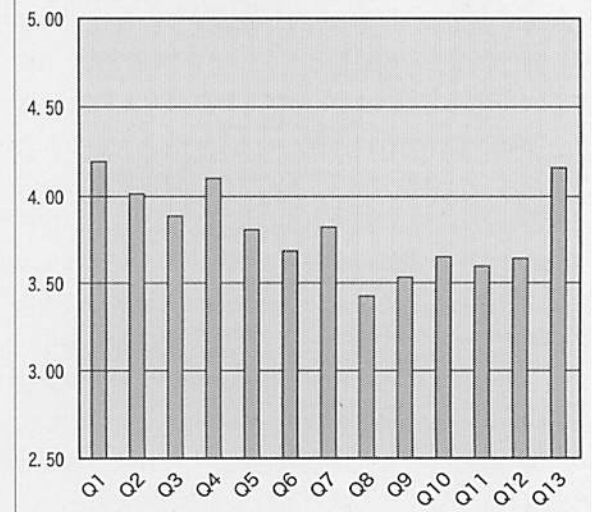


図8. 6模擬授業の各項目の平均点





実施の仕方が効果的か、多様な実践を通して検討していく必要がある。

- 模擬授業の経験を重視するとともに、授業に対する反省・検討会を活性化し、より効果的なものにしていく必要がある。今回の実践では、授業評価と学生のレポートに基づいて反省的に授業改善を図っていった。授業改善の方法は多様であり、どういったデータをどのように収集すれば効果的か、また、そうしたデータ収集や授業分析の方法自体も指導していく必要がある。
- 体育教師教育カリキュラムの全体を見通した検討が求められる。今回は、教育実習前の授業であったが、教育実習での指導、教育実習後の指導とも関連させながら、また、他の授業（教科に関する科目、教職に関する科目）とも関連させながらカリキュラム全体のあり方や具体的な授業のあり方についての検討が必要である。

## 文 献

- 長谷川悦示, 岡出美則, 高橋健夫 (2001) 大学における体育教師教育カリキュラムの検討-模擬授業による授業の実施能力および評価能力の養成. スポーツ教育学研究第21回大会号: 42.
- 日野克博 (2002) 教育実習生の体育授業における教師行動の特徴-特に「授業場面」と「教師の相互作用」の分析を通して. 日本体育学会第53回大会号: 597.
- 国立の教員養成系大学学部の在り方に関する懇談会 (2001) 今後の国立教員養成系大学学部の在り方について(報告). [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/houdou/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/houdou/index.htm).
- 教員職員養成審議会 (1997) 新たな時代に向けた教員養成の改善方策について (第1次答申). [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/index.htm).
- 向山貴仁, 山崎利夫 (2001) 体育授業における教授スキルの向上を目指した模擬授業の検討. 体育科教育学研究17-2: 11-27.
- 向山貴仁, 山崎利夫 (2002) 実践的な保健体育教師の養成を目指した模擬授業の改善-鹿屋体育大学における平成12・13年度の取り組み. 体育科教育学研究18-2: 29-40.
- 岡出美則, 米村耕平, 小松崎敏, 長谷川悦示, 七沢朱音 (2001a) 大学における模擬授業の展開-実践的指導力の育成を目指して. 学校体育54-1: 51-53.
- 岡出美則, 米村耕平, 小松崎敏, 長谷川悦示, 七沢朱音 (2001b) 大学における模擬授業の展開 (II) -実践的指導力の育成を目指して. 学校体育54-2: 51-53.
- 高橋健夫 (2000) 子どもが評価する体育授業過程の特徴: 授業過程の学習行動及び指導行動と子どもによる授業評価との関係を中心にして. 体育学研究45-2: 147-162.
- 高橋健夫他 (2001) 日本および諸外国の学校体育カリキュラムの実状と課題. 平成11, 12年度科学研究費補助金 (基盤研究A(1)) 研究成果報告書.